

学位論文要旨

青年期の自己愛的脆弱性と発達早期要因の検討
——心理社会的課題, 愛着スタイル, 自己対象体験との関連——

広島大学大学院教育学研究科
教育人間科学専攻

神谷 真由美

目 次

第 1 章 本研究の背景と目的

第 1 節 青年期の自己愛に関する研究の動向

第 2 節 Kohut の自己の発達に関する研究の動向

第 3 節 本研究の目的

第 2 章 自己愛的脆弱性による青年の類型化 (研究 1)

第 3 章 自己愛的脆弱性と心理社会的課題および愛着スタイルとの関連

第 1 節 自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚との関連

(研究 2-1)

第 2 節 自己愛的脆弱性と愛着スタイルとの関連 (研究 2-2)

第 4 章 自己愛的脆弱性と自己対象体験との関連

第 1 節 自己愛的脆弱性と現在の自己対象体験との関連 (研究 3-1)

第 2 節 自己愛的脆弱性と親との自己対象体験との関連 (研究 3-2)

第 3 節 自己愛的脆弱性と自己対象体験の無意識的側面との関連

(研究 3-3)

第 5 章 総合考察

第 1 節 本研究の成果

第 2 節 本研究の限界と今後の課題

引用文献

第1章 本研究の背景と目的

第1節 青年期の自己愛に関する研究の動向

青年期は両親からの精神的離脱のプロセスにあり、自我が弱体化して脆弱となり、それらに対する防衛として自己愛 (narcissism) が高まる (小此木, 1981)。この自己愛とは、自分自身を愛の対象とする心の状態である (中村, 2004)。Freud (1914 懸田他訳 1969) が自己愛の概念を提唱して以降、自己愛は精神分析にとどまらず一般心理学の実証研究にも用いられるようになってきている。それに伴い、自己愛という用語が一般的な心理的機能を表す用語としても、特定のパーソナリティやその障害を表す用語としても使用されるようになり、定義・理論ともに多義的な状態となっている (川崎, 2011)。

近年、病的自己愛を、対人的スタイルの特徴により2類型から捉える視点が隆盛になっている。2類型とは、Kernberg (1982) の考える自己顕示的で他者の反応に鈍感な誇大型自己愛傾向と、Kohut (1971 水野他監訳 1994) の考える他者の反応に敏感で注目されるのを避ける過敏型自己愛傾向である。この2類型は臨床場面だけでなく、非臨床群の自己愛傾向の研究にも当てはめられており (例えば, 相澤, 2002; Hibbard, 1992; Wink, 1991), 青年を対象に、2類型をもとにした自己愛傾向のサブタイプも見出されている (中山・中谷, 2006; 小塩, 2004; 清水・川邊・海塚, 2007)。しかし日本では、文化的背景から、自己愛性パーソナリティ障害の症例において、過敏型自己愛傾向が現われやすいと言われている (福井, 1998; Ronningstam, 2005)。また非臨床群においても、精神的健康の低さ、不合理な信念などの認知の高さ、うつ傾向の高さといった不適応と関連がみられるのは過敏型自己愛傾向である (上地・宮下, 2005; 清水他, 2008a; 清水・岡村, 2010)。Kohut の理論に基づき、臨床群から非

臨床群まで観察される過敏型自己愛傾向を記述するために提唱された概念に、自己愛的脆弱性 (narcissistic vulnerability) がある。上地・宮下 (2005, 2009) は、自己愛的脆弱性を“自己愛的欲求の表出に伴う不安や他者の反応による傷つきなどを処理し、心理的安定を保つ力が脆弱であること”と定義した。上地・宮下 (2005) は 5 下位尺度からなる自己愛的脆弱性尺度を作成し、その後、4 下位尺度からなる自己愛的脆弱性尺度短縮版 (上地・宮下, 2009) を作成した。4 下位尺度の内容は、自己顕示抑制 (自己顕示を恥ずかしいものと感じて抑制する傾向)、自己緩和不全 (不安や抑うつを自分で緩和する力の弱さ)、潜在的特権意識 (自分への特別の配慮を求める傾向)、承認・賞賛への過敏性である。

以上から日本の青年理解を深めるためには、自己愛的脆弱性に着目する必要がある。自己愛的脆弱性のサブタイプを見出し、サブタイプの特徴を実証的に分析し、発展させることで、一般青年の自己愛的脆弱性への査定的な資料に加え、該当する臨床群への治療的示唆が得られる。

第 2 節 Kohut の自己の発達に関する研究の動向

Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1984 本城他監訳 1995) によると、個人は生涯にわたって自己対象体験を必要とする。自己対象体験とは、特定の人物や対象、象徴によって喚起される、自己を支えるために必要な体験である。Kohut は、鏡映・理想化・双子の 3 つの自己対象体験があるとした。鏡映自己対象体験は自分自身が表出した行動や感情を映し返してもらうことで自己が承認される体験、理想化自己対象体験は理想化した対象と融合することで安心感がもたらされる体験、双子自己対象体験は自己と対象の間に類似性や共通性を感じる体験である。また Kohut は自己の発達について、以下のように述べている。乳児は断片的な自己の状態であるが、養育者との融合の特質が強い原始的な自己対象体験を

経て、自己の凝集性が高まっていく。その後、十分な自己対象体験がありながら適量の欲求不満が与えられることにより、自己対象体験が担っていた自己を安定化させる機能を内在化していく(変容性内在化)。それにより、原始的な自己対象体験を必要とせずとも、自律的に自己を安定化させることが可能となる。原始的な自己対象体験が不十分であったり、変容性内在化がうまくいかないと、自己愛的な傷つきやすさが顕著になる(上地, 2004; 中西, 1991)。Kohutの理論では、発達早期から養育者をはじめとする環境から受ける体験が、自己愛の発達に影響を与えることが述べられているが、実証的な検討はなされていない。

Kohutの理論と同様、発達早期から環境との関係を重視し、豊富な実証研究の蓄積がある理論にErikson(1950 仁科訳 1977, 1980)の精神分析的な心理社会的発達論や、Bowlby(1953, 1969 黒田他訳 1976)の愛着理論がある。非臨床群の青年を対象に、自己愛傾向とアイデンティティとの関連を検討した実証研究(例えば、原田, 2012; 清水他, 2008b)では、誇大型自己愛傾向はアイデンティティの形成を促進するが、過敏型自己愛傾向はアイデンティティの拡散と関連することが示唆されている。また非臨床群の青年を対象に、愛着スタイルとの関連を検討した実証研究(Brennan & Shaver, 1998; Smolewska & Dion, 2005)では、自己愛性パーソナリティ障害傾向、過敏型自己愛傾向が不安定な愛着スタイルと関連することが示されている。自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感、愛着スタイルとの関連を検討することで、自己愛的脆弱性の形成の背景にある発達早期からの環境との関係を間接的に明らかにできるであろう。

またKohut(1984 本城他監訳 1995)によると、個人のこれまでの人生すべての段階の自己対象体験は、現在の自己対象体験の無意識的な基底を形成する。調査時点での自己対象体験と自己愛傾向の関連を検討した

実証研究 (Banai, Mikulincer, & Shaver, 2005; 近藤, 2009; 緒賀, 2001; 白井, 2006) はいくつかみられるが, これらの研究で用いられた自己愛傾向を測定する尺度は, Kohut の理論を十分に反映した尺度ではなく, 一貫した結果は得られていない。またこれらの実証研究のうち自己対象体験の無意識的側面を捉えているのは近藤 (2009) のみである。そのため自己愛的脆弱性の形成の背景を実証的に検討するために, 自己愛的脆弱性と現在の自己対象体験の特徴の関連を検討するだけでなく, これまでの自己対象体験を, 無意識的側面を含めて捉える必要がある。

第 3 節 本研究の目的

① 青年期の非臨床群の自己愛的脆弱性を下位尺度の組合せで類型化することで, 自己愛的脆弱性のサブタイプを見出す (研究 1)。これにより類型間の相違についての言及が可能となるため, このサブタイプにもとづき自己愛的脆弱性の質的な違いについて検討を行う。② 自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚および愛着スタイルとの関連を検討する (研究 2)。③ 自己愛的脆弱性と自己対象体験との関連を検討する (研究 3)。

第 2 章 自己愛的脆弱性による青年の類型化 (研究 1)

1. 目的 青年の自己愛的脆弱性を下位尺度の組合せで類型化し, 自己愛的脆弱性のサブタイプについて検討する。

2. 方法 (1) 対象者 大学生 234 名 (男性 105 名, 女性 129 名)。 (2) 尺度 自己愛的脆弱性尺度短縮版 (以下, NVS 短縮版; 上地・宮下, 2009)。4 下位尺度で構成。5 段階評定 (1 点～5 点), 全 20 項目。

3. 結果と考察 NVS 短縮版の 4 下位尺度得点を標準化し, 非階層法によるクラスタ分析を行い, 下位尺度の特徴を最もよく表す 4 クラスタを採用した (Figure 1)。4 下位尺度得点全てが各下位尺度の平均値より低い群

を NV 低群 ($n=48$), 「自己顕示抑制」が低く「自己緩和不全」が高い群を自己緩和困難群 ($n=83$), 4 下位尺度得点全てが高い群を NV 高群 ($n=38$), 「自己顕示抑制」が高く「自己緩和不全」が低い群を抑制優位群 ($n=65$) と命名した。次に, 自己愛的脆弱性サブタイプの下位尺度得点の特徴を, 研究 1 の対象者内のみでなく, 同一尺度を用いた先行研究との比較によって検討した。大学生 460 名を対象にした上地・宮下 (2009) の NVS 短縮版下位尺度得点と, 自己愛的脆弱性サブタイプの下位尺度得点を比較した (t 検定, Welch の検定; Table 1)。その結果, 先行研究と比較して, NV 低群は 4 下位尺度得点全てが有意に低く, NV 高群は有意に高かった。自己緩和困難群は「自己緩和不全」が有意に高く, 「承認・賞賛過敏性」は有意に低かった。抑制優位群は, 「自己顕示抑制」が有意に高く, 「自己緩和不全」は有意に低かった。以下に, 自己愛的脆弱性のサブタイプの特徴を述べる。NV 低群は, 緊張や不安を自分で緩和する力があり, 心理的安定を保つ力がある。他者から特別な配慮を求める傾向や, 承認・賞賛への過敏さ, 自己表現を抑制する傾向は低い。自己緩和困難群は, 承認・賞賛への過敏さは低く, 周囲に自分を表現することに抵抗はないが, 傷つきを独りで処理することができない。NV 高群は, 傷つきを自分で抱えられず, 周囲からの配慮を求めるが, 周囲の反応に過敏

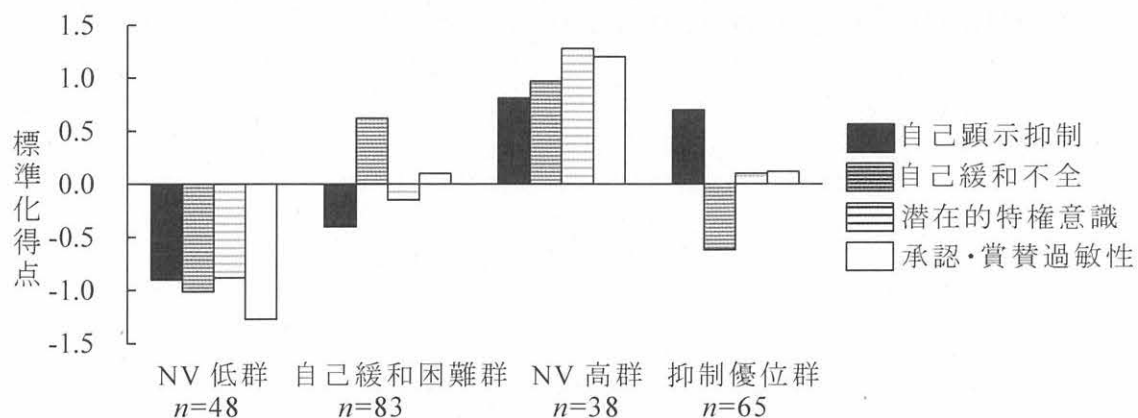


Figure 1. NVS 短縮版の下位尺度の組合せによる自己愛的脆弱性のサブタイプ

で自分を出すことを抑える。抑制優位群は、傷つきを人に話すことなく自分で処理しようとする力はあるが、周囲に自分を表現した後には自分を出しすぎたのではないかと、自己表現を抑えることが示された。

Table 1
研究1での自己愛的脆弱性サブタイプの
NVS短縮版下位尺度得点の平均値(標準偏差)と先行研究との比較

	上地・宮下 (2009)	NV低群	自己緩和 困難群	NV高群	抑制優位群
自己顕示抑制	2.95 (0.91)	2.63 (0.65) **	3.03 (0.54)	4.00 (0.55) **	3.91 (0.62) **
自己緩和不全	2.92 (0.89)	2.19 (0.66) **	3.70 (0.59) **	4.02 (0.64) **	2.55 (0.49) **
潜在的特権意識	2.62 (0.67)	2.00 (0.57) **	2.56 (0.53)	3.66 (0.70) **	2.75 (0.58)
承認・賞賛過敏性	3.34 (0.79)	2.06 (0.54) **	3.19 (0.49) *	4.11 (0.60) **	3.21 (0.58)

注) 各下位尺度の総得点を項目数で割った数値を、下位尺度得点とした。

* $p < .05$, ** $p < .01$

第3章 自己愛的脆弱性と心理社会的課題および愛着スタイルとの関連

第1節 自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚との関連 (研究2-1)

1. 目的 自己愛的脆弱性と、心理社会的課題の達成感覚との関連を検討する。

2. 方法 (1) 対象者 研究1と同じ対象者。(2) 尺度 エリクソン心理社会的段階目録検査 (以下, EPSI; 中西・佐方, 2001)。8 下位尺度で構成。5 段階評定 (1 点~5 点), 56 項目。EPSI の各下位尺度のまとまりを検討するために、下位尺度ごとに成分を 1 に指定した主成分分析を行い、共通性が 0.30 より低い 6 項目を分析から除外した。

3. 結果と考察 自己愛的脆弱性サブタイプの相違を検討する前に、特性としての自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚の関連を検討するため、NVS 短縮版と EPSI の相関係数を算出した。その結果、中程度の負の相関がみられたのは「自己顕示抑制」と「信頼性」, 「承認・賞賛過敏性」と「信頼性」, 「自律性」, 「自主性」であった ($r_s = -.41 \sim .43$, $p_s < .01$)。NVS 短縮版の 4 下位尺度のうち「自己顕示抑制」と「承認・賞賛過敏性」の高さが、心理社会的課題の達成感覚の低さと関連していることが示さ

れた。次に、自己愛的脆弱性のサブタイプを独立変数、EPSIの各下位尺度得点を従属変数として1要因分散分析を行った (Table 2)。その結果、「信頼性」、「自律性」、「自主性」、「同一性」、「親密性」、「統合性」でサブタイプの主効果が認められた。多重比較の結果、NV低群は主効果のみられた6つの心理社会的課題の達成感覚が他群より有意に高かった。自己愛的脆弱性の全般的な低さが、多くの心理社会的課題の達成感覚の高さと関連していることが示された。自己緩和困難群は、「自律性」、「自主性」、「同一性」といった自己のあり方に関連する達成感覚は低く、「信頼性」、「親密性」といった他者とのかかわりに関連する達成感覚は高かった。自己のあり方に関する脆弱さが、他者に感情の緩和を求める傾向の強さと関連していると考えられる。しかし他者とのかかわりに抵抗が少ないため、他者に感情を緩和してもらうことで、ある程度の心理的安定を保つことが可能であると考えられる。NV高群と抑制優位群は、6つの心理社会的課題の達成感覚が有意に低かった。NV高群では、自己愛的脆弱性の全般的な高さが、多くの心理社会的課題の達成感覚の低さと関連していることが示された。抑制優位群は、傷つきを自分で処理しようとする特徴があるが、これは自律性や自主性から生じているのでは

Table 2
自己愛的脆弱性サブタイプの心理社会的課題の達成感覚の比較

	NV低群 M (SD)	自己緩和困難群 M (SD)	NV高群 M (SD)	抑制優位群 M (SD)	F (3, 230)	多重比較 (Tukey法)
信頼性	3.51 (0.53)	3.25 (0.48)	2.69 (0.60)	2.88 (0.62)	21.20 **	高, 抑制 < 困難, 低
自律性	3.58 (0.66)	2.91 (0.78)	2.82 (0.90)	2.78 (0.66)	12.79 **	高, 抑制, 困難 < 低
自主性	3.27 (0.53)	2.95 (0.57)	2.68 (0.66)	2.76 (0.45)	10.88 **	高, 抑制, 困難 < 低
勤勉性	3.38 (0.50)	3.18 (0.63)	3.17 (0.63)	3.08 (0.51)	2.46	
同一性	3.68 (0.51)	3.33 (0.65)	3.12 (0.69)	3.23 (0.50)	7.87 **	高, 抑制, 困難 < 低
親密性	3.83 (0.51)	3.77 (0.62)	3.39 (0.71)	3.38 (0.54)	9.42 **	高, 抑制 < 困難, 低
生殖性	3.28 (0.53)	3.14 (0.62)	3.10 (0.65)	2.97 (0.71)	2.33	
統合性	3.72 (0.62)	3.49 (0.64)	3.02 (0.81)	3.27 (0.56)	9.65 **	高, 抑制 < 低; 高 < 困難, 低

注 1) 各下位尺度の総得点を項目数で割った数値を、下位尺度得点とした。

注 2) 多重比較において、低=NV低群; 困難=自己緩和困難群; 高=NV高群; 抑制=抑制優位群。

** $p < .01$

なく、他者への信頼の低さから生じていると考えられる。

第2節 自己愛的脆弱性と愛着スタイルとの関連 (研究 2-2)

1. 目的 自己愛的脆弱性と、愛着スタイルとの関連を検討する。

2. 方法 (1) 対象者 大学生・大学院生 209 名 (男性 70 名, 女性 138 名, 不明 1 名)。(2) 類型化の手続き NVS 短縮版の 4 下位尺度得点を標準化し, Ward 法によるクラスタ分析を行った (Figure 2)。4 下位尺度得点全てが各下位尺度得点の平均より低いクラスタ ($n=82$), 自己緩和不全が高いクラスタ ($n=45$), 4 下位尺度得点全てが高いクラスタ ($n=50$), 自己顕示抑制が高いクラスタ ($n=32$) が抽出された。研究 1 と各クラスタの対象者数が異なるが, 4 クラスタが研究 1 と同様の自己愛的脆弱性の性質をもつことから, 研究 1 に基づき命名を行った。各群の下位尺度得点の平均値を Table 3 に示した。(3) 尺度 愛着スタイル尺度 (戸田, 1988)。3 下位尺度で構成。6 段階評定 (1 点~6 点), 18 項目。本研究では, 山岸 (2000) を参考に, 下位尺度のうち「回避」を, 「自力志向」と「情緒的回避」に分けて分析を行った。

3. 結果と考察 特性としての自己愛的脆弱性と愛着スタイルの関連を検討するため, NVS 短縮版と愛着スタイル尺度の相関係数を算出した。その結果, 中程度の正の相関がみられたのは「自己顕示抑制」と「アン

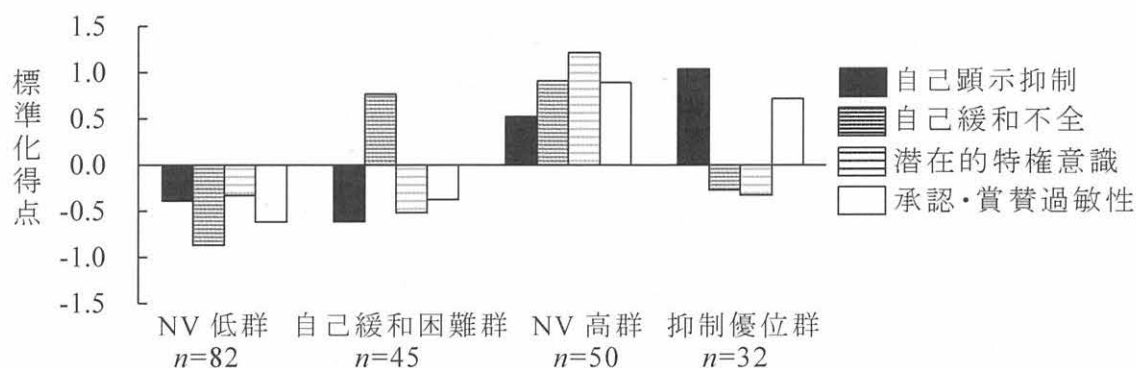


Figure 2. 研究 2-2 の対象者における自己愛的脆弱性のサブタイプ

Table 3
 研究2-2での自己愛的脆弱性サブタイプの
 NVS短縮版下位尺度得点の平均値(標準偏差)

	NV低群	自己緩和困難群	NV高群	抑制優位群
自己顕示抑制	3.08 (0.67)	2.90 (0.65)	3.82 (0.73)	4.24 (0.41)
自己緩和不全	1.83 (0.45)	3.14 (0.40)	3.25 (0.60)	2.31 (0.50)
潜在的特権意識	2.29 (0.60)	2.15 (0.37)	3.45 (0.61)	2.29 (0.51)
承認・賞賛過敏性	2.59 (0.63)	2.79 (0.76)	3.84 (0.56)	3.70 (0.43)

注) 各下位尺度の総得点を項目数で割った数値を、下位尺度得点とした。

ビバレント」, 「承認・賞賛過敏性」と「アンビバレント」であった(順に, $r_s = .57, .54, p_s < .01$)。NVS 短縮版の4下位尺度のうち「自己顕示抑制」と「承認・賞賛過敏性」の高さが, 不安定な愛着スタイルと関連していることが示された。次に, 自己愛的脆弱性サブタイプを独立変数, 各下位尺度得点を従属変数とする1要因分散分析を行った(Table 4)。その結果, 「安定」, 「アンビバレント」, 「自力志向」でサブタイプの主効果が認められた。多重比較の結果, NV低群は「安定」は低いが, 「アンビバレント」も低く, 「自力志向」は高かった。対人関係上の不安や依存心が低く, 自立への志向性が強いと考えられる。自己緩和困難群は「安定」が高く, 「アンビバレント」, 「自力志向」が低かった。安定した愛着スタイルをもつと考えられるが, 自立への志向性は低く, 依存的であると推察される。NV高群, 抑制優位群は「アンビバレント」が高かった。対人関係上の不安が強く, 些細なことでも情緒的に不安定になりやすいと考えられる。Feeney (1999), 金政 (2005) によると, 不安定型の愛着スタイル(アンビバレント, 回避)と感情の表出は負の関係があるとされている。他者に自己顕示を恥ずかしいと抑制する傾向は, 感情表出の抑制とも関連すると考えられる。そのため「自己顕示抑制」の高いNV高群, 抑制優位群は「アンビバレント」が高まったと推察される。また「安定」において, 抑制優位群はNV高群より得点が低かった。NV高群の方が抑制優位群と比較して, 他者との関係を築きやすいと考えられる。

Table 4

自己愛的脆弱性サブタイプの愛着スタイルの比較

	NV低群 M (SD)	自己緩和困難群 M (SD)	NV高群 M (SD)	抑制優位群 M (SD)	F (3, 205)	多重比較
安定	3.41 (0.84)	3.93 (0.58)	3.69 (0.88)	3.16 (0.78)	7.40 **	抑制<高, 困難: 低<困難 ^{a)}
アンビバレント	3.05 (0.69)	3.02 (0.75)	3.91 (0.85)	3.92 (0.65)	23.06 **	低, 困難<高, 抑制 ^{a)}
自力志向	3.20 (0.87)	2.55 (0.77)	3.21 (1.09)	3.34 (0.61)	7.31 **	困難<低, 高, 抑制 ^{b)}
情緒的回避	2.88 (1.23)	2.76 (0.95)	3.17 (1.31)	2.75 (0.94)	1.34	

注 1) 各下位尺度の総得点を項目数で割った数値を、下位尺度得点とした。

注 2) 多重比較において、低=NV低群; 困難=自己緩和困難群; 高=NV高群; 抑制=抑制優位群。

** $p < .01$

^{a)} Tukey法, ^{b)} Games-Howell法

第 4 章 自己愛的脆弱性と自己対象体験との関連

第 1 節 自己愛的脆弱性と現在の自己対象体験との関連 (研究 3-1)

1. 目的 自己愛的脆弱性と、現在の自己対象体験との関連を検討する。
2. 方法 (1) 対象者・類型化の手続き 研究 2-2 と同じ対象者。(2) 尺度 自己対象体験尺度 (小林, 2006)。3 下位尺度で構成。5 段階評定 (1 点～5 点), 15 項目。
3. 結果と考察 特性としての自己愛的脆弱性と現在の自己対象体験の関連を検討するため、NVS 短縮版と自己対象体験尺度の相関係数を算出した。その結果、中程度以上の相関は認められなかった。次に、自己愛的脆弱性サブタイプを独立変数、自己対象体験尺度の各下位尺度得点を従属変数として 1 要因分散分析を行った (Table 5)。その結果、主効果は「鏡映自己対象体験」、「双子自己対象体験」で有意、「理想化自己対象体験」で有意傾向となった。多重比較の結果、NV 低群は「鏡映自己対象体験」、「双子自己対象体験」が低く、「理想化自己対象体験」も低い傾向があった。自己対象体験を多く必要とせずとも、心理的安定が保たれていると示唆される。自己緩和困難群は、「鏡映自己対象体験」、「双子自己対象体験」が高かった。心理的安定を維持するために、周囲からの共感や、自分と同様の感覚をもっていると感じられるような自己対象体験が

多く必要となると考えられる。NV 高群は、「双子自己対象体験」が NV 低群よりも高かった。周囲との類似性・共通性を確認することで心理的安定を保つと考えられる。抑制優位群は、「鏡映自己対象体験」、「双子自己対象体験」が低く、「理想化自己対象体験」が高い傾向があった。周囲と感情を共有するよりも、理想的な存在を求める傾向が推察される。

Table 5
自己愛的脆弱性サブタイプの自己対象体験の比較

	NV低群 M (SD)	自己緩和困難群 M (SD)	NV高群 M (SD)	抑制優位群 M (SD)	F (3, 205)	多重比較 (Tukey法)
鏡映自己対象体験	3.77 (0.65)	4.14 (0.69)	3.95 (0.69)	3.70 (0.64)	4.05 **	低, 抑制<困難
双子自己対象体験	3.62 (0.54)	4.00 (0.55)	3.92 (0.56)	3.66 (0.51)	6.58 **	低, 抑制<困難; 低<高
理想化自己対象体験	4.43 (0.68)	4.51 (0.61)	4.62 (0.58)	4.74 (0.46)	2.41 †	低<抑制

注1) 各下位尺度の総得点を項目数で割った数値を、下位尺度得点とした。

注2) 多重比較において、低=NV低群; 困難=自己緩和困難群; 高=NV高群; 抑制=抑制優位群。

** $p < .01$, † $p < .10$

第2節 自己愛的脆弱性と親との自己対象体験との関連 (研究3-2)

1. 目的 自己愛的脆弱性と、青年の回想的な語りによる、幼児期から青年期までの親との自己対象体験との関連を検討する。

2. 方法 (1) 対象者 研究1の対象者のうち、面接調査の協力に応じた20名 (男性8名, 女性12名)。NV低群3名, 自己緩和困難群6名, NV高群5名, 抑制優位群6名。(2) 調査方法と質問内容 半構造化面接を行い、幼児期からの親との印象的なエピソードを尋ねた。適宜、①エピソードが何歳の時のものか、②親に対してどう思ったかを質問した。(3) 分析方法 佐藤 (2008) の定性的コーディングの演繹的アプローチを参考に行った。Kohut の理論をもとに分析のアウトラインを想定し、以下の分析を行った。①録音記録をもとに逐語記録を作成した。②逐語記録から親との関わりや、親への感情について言及している部分を意味のある単位として抽出した (文書セグメント化)。③文書セグメントを幼児期・児童期と思春期以降の2つの時期に分類した。④各文書セグメント

にオープン・コードを付与した。⑤オープン・コードの特徴を整理し、類似したものをまとめ、焦点的コード、下位コード、上位コードの順に精緻化を行った。⑥コードの信頼性を確認するため、臨床心理学を専攻する大学院生1名が評定を行った。一致率は88.24-97.79%であった。

3. 結果と考察 幼児期・児童期は33の焦点的コードから8の下位コード、思春期以降は27の焦点的コードから8の下位コードを作成した。また各時期の自己の発達を促進するような自己対象体験かどうかという基準により、2の上位コードを作成した。その後、自己愛的脆弱性サブタイプの特徴を明らかにするために、それぞれの対象者の文書セグメントをコード別に整理した事例ーコード・マトリックス(佐藤, 2008)を、サブタイプごとに作成した。その結果、NV低群と自己緩和困難群は、幼児期・児童期に親との十分な自己対象体験があり、NV高群と抑制優位群は不十分であることが示された。多様な自己対象体験が蓄積されることが、自己表現への抵抗の少なさという自己愛傾向の健康的な側面の発達と関連し、自己対象体験の不全が、自己の不安定さや自己表現の抑制と関連することが示唆された。幼児期・児童期の親との自己対象体験が不十分であったNV高群と抑制優位群は、思春期以降の親との自己対象体験に差異がみられた。抑制優位群の場合は、満たされなかった親への自己対象欲求を抑圧しているが、NV高群の場合は、親との間に融合の特質が強い自己対象体験が持続していると推察される。

第3節 自己愛的脆弱性と自己対象体験の無意識的側面との関連

(研究 3-3)

1. 目的 自己愛的脆弱性と、母子画(Gillespie, 1989)による自己対象体験の無意識的側面との関連を検討する。

2. 方法 (1) 対象者・類型化の手続き 研究 2-2 と同じ対象者。(2) 調

査方法 母子画を集団で実施。「お母さんと子どもの絵を描いてください」と教示。**(3) 母子画の分析項目** 馬場 (2005) による母子画の表現型 5 項目 (形態, サイズ, 表情, 身体接触, アイコンタクト)。

3. 結果と考察 分析項目について, 馬場 (2005) の標準・準標準・非標準タイプの分類をもとに, 自己愛的脆弱性サブタイプにおける出現状況の比較を行った結果, 全ての項目で有意差がみられなかった。そのため自己愛的脆弱性サブタイプの特徴をよく表すと考えられる 25%を抽出した (NV 低群から NVS 短縮版の総得点が低い 21 名。自己緩和困難群から自己緩和不全得点の高い 13 名。NV 高群から NVS 短縮版の総得点が高い 14 名。抑制優位群から自己顕示抑制得点の高い 13 名)。各サブタイプの標準・準標準タイプと非標準タイプの出現頻度を比較した (Fisher の直接確率計算法)。その結果, サイズで有意傾向がみられた ($p=.06$)。自己緩和困難群は非標準的なタイプが少なく, NV 高群は多い傾向があった。自己緩和困難群は標準的な母子のイメージを持ち, NV 高群は標準的ではない母子のイメージを持つ傾向があると推測される。

第 5 章 総合考察

第 1 節 本研究の成果

本研究は, Kohut の理論にもとづき, 青年の自己愛的脆弱性の特質をとらえることを目的とした。研究 1 では, 青年期の非臨床群の自己愛的脆弱性を下位尺度得点の組合せで類型化し, 自己愛的脆弱性が全般的に低い NV 低群, 自己緩和不全が目立つ自己緩和困難群, 自己愛的脆弱性が全般的に高い NV 高群, 自己顕示抑制が目立つ抑制優位群の 4 つのサブタイプを見出した。研究 2, 3 では, 自己愛的脆弱性の形成の背景にある, 発達早期からの環境との関係を実証的に明らかにするため, 自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚 (Erikson, 1950 仁科訳 1977,

1980), 愛着理論 (Bowlby, 1953, 1969 黒田他訳 1976), 自己対象体験との関連を検討した。その結果, NV 低群は, 心理社会的課題の達成感覚が高く, 幼児期・児童期に十分な自己対象体験があることが示された。一方で NV 高群は, 心理社会的課題の達成感覚が低く, 不安定な愛着スタイルをもち, 幼児期・児童期の自己対象体験が不十分であり, 未成熟な自己対象体験への欲求が持続していることが示された。この結果は, 自己愛的脆弱性の形成には, 発達早期からの環境の影響が関連していることを示唆し, Kohut の理論を支持する結果である。また自己緩和困難群は, 自己のあり方に関する心理社会的課題の達成感覚が低い, 安定した愛着スタイルであり, 幼児期・児童期に十分な自己対象体験をもち, 共感的な自己対象体験を求めることが示された。一方で抑制優位群は, 心理社会的課題の達成感覚が低く, 不安定な愛着スタイルであり, 幼児期・児童期の自己対象体験は不十分で, 自己対象体験への欲求を抑制していることが示された。この結果から, 自己愛的脆弱性の視点から青年を理解する際, 自己愛的脆弱性の高低のみに注目するのではなく, その特質を含めて検討する必要性を示した点は, 本研究の成果である。

第2節 本研究の限界と今後の課題

本研究の知見は, 非臨床群の青年を対象にした調査から得られたものである。対象者が自己愛的脆弱性の高さや特徴を有していても, 大半は深刻なレベルにない。そのため研究3の一部で, サブタイプの差を見出すことが困難であったと考えられる。今後は, 臨床群を含めた検討を行うことで, 各群の差が明確に見出せると思われる。また, 研究1, 2-1, 3-2と研究2-2, 3-1, 3-3では, 自己愛的脆弱性サブタイプの構成比が異なる。このため, 本研究で得られた知見を青年理解に応用することには慎重を期する。そのため, 今後は類型自体の妥当性の検討を行い, 知見

を蓄積する必要がある。

引用文献

- 相澤直樹 (2002). 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究, **50**, 215-224.
- 馬場史津 (2005). 母子画の基礎的・臨床的研究 北大路書房
- Banai, E., Mikulincer, M., & Shaver, P. R. (2005). Selfobject needs in Kohut's self psychology: Links with attachment, self-cohesion, affect regulation, and adjustment. *Psychoanalytic Psychology*, **22**, 224-260.
- Bowlby, J. (1953). *Child care and the growth of love*. Harmondsworth: Penguin Books.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss*. Vol. 1. *Attachment*. London: Hogarth Press.
- (ボウルヴィ, J. 黒田実郎・大羽 葵・岡田洋子 (訳) (1976). 母子関係の理論——I 愛着行動—— 岩崎学術出版社)
- Brennan, K. A., & Shaver, P. R. (1998). Attachment styles and personality disorders: Their connections to each other and to parental divorce, parental death, and perceptions of parental caregiving. *Journal of Personality*, **66**, 835-878.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.
- (エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977, 1980). 幼児期と社会 1, 2 みすず書房)
- Feeney, J. A. (1999). Adult attachment, emotional control, and marital satisfaction. *Personal Relationships*, **6**, 169-185.
- Freud, S. (1957). On narcissism: An introduction. In J. Strachey (Ed. &

Trans.), *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud*. Vol. 14. London: Hogarth Press. pp. 69-102. (Original work published (1914).)

(フロイト, S. 懸田克躬・高橋義孝他 (訳) (1969). ナルシシズム入門
フロイト著作集 5 人文書院 pp. 109-132.)

福井 敏 (1998). 誇大的な自己——自己愛性障害—— こころの科学,
82, 75-80.

Gillespie, J. (1989). Object relations as observed in projective
mother-and-child drawings. *The Arts in Psychotherapy*, **16**, 163-170.

原田 新 (2012). 発達の移行における自己愛と自我同一性との関連の変
化 発達心理学研究, **23**, 95-104.

Hibbard, S. (1992). Narcissism, shame, masochism, and object relation: An
exploratory correlational study. *Psychoanalytic Psychology*, **9**, 489-508.

上地雄一郎 (2004). 自己愛の障害とその形成過程 上地雄一郎・宮下一
博 (編) もろい青少年の心——自己愛の障害・発達臨床心理学的考
察—— 北大路書房 pp. 2-33.

上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフトの自己心理学に基づく自己愛的
脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究, **14**, 80-91.

上地雄一郎・宮下一博 (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆
弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性 パーソナリティ研究, **17**,
280-291.

金政祐司 (2005). 青年期の愛着スタイルと感情の調節と感受性ならびに
対人ストレスコーピングとの関連——幼児期と青年期の愛着スタ
イル間の概念的ー貫性についての検討—— パーソナリティ研究, **14**,
1-16.

- 川崎直樹 (2011). 自己愛の心理学的研究の歴史 小塩真司・川崎直樹
(編) 自己愛の心理学——概念・測定・パーソナリティ・対人関係
—— 金子書房 pp. 2-21.
- Kernberg, O. F. (1982). Narcissism. In S. L. Gilman (Ed.), *Introducing
psychoanalytic theory*. New York: Brunner/Mazel. pp. 126-136.
- 小林卓也 (2006). 自己対象体験の因子構造——心理的な支えという視点
から—— 福祉心理学研究, **3**, 64-71.
- Kohut, H. (1971). *The analysis of the self*. New York: International
Universities Press.
(コフト, H. 水野信義・笠原 嘉 (監訳) (1994). 自己の分析 みす
ず書房)
- Kohut, H. (1984). *How does analysis cure?* Chicago: The University of
Chicago Press.
(コフト, H. 本城秀次・笠原 嘉 (監訳) (1995). 自己の治癒 みす
ず書房)
- 近藤孝司 (2009). S-HTPP 法における自己愛の諸相——人物像の描画表
現についての自己心理学からの理解—— 心理臨床学研究, **27**,
333-343.
- 中村留貴子 (2004). 自己愛 (ナルシシズム) 氏原 寛・亀口憲治・成田
善弘・東山紘久・山中康裕 (編) 心理臨床大事典 改訂版 培風館
pp. 1077-1079.
- 中西信男 (1991). コフトの心理療法——自己心理学的精神分析の理論
と技法—— ナカニシヤ出版
- 中西信男・佐方哲彦 (2001). EPSI——エリクソン心理社会的段階目録検
査—— 上里一郎 (監修) 心理アセスメントハンドブック 第2版

- 西村書店 pp. 365-376.
- 中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達の變化の検討 教育心理学研究, **54**, 188-198.
- 緒賀郷志 (2001). 自己対象体験尺度作成に関する基礎的研究——質問項目と妥当性の検討—— 岐阜大学教育学部研究報告人文科学, **50**, 125-132.
- 小此木啓吾 (1981). 自己愛人間 朝日出版社
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- Ronningstam, E. F. (2005). *Identify and understanding the narcissistic personality*. New York: Oxford University Press.
- 佐藤郁哉 (2008). 質的データ分析法——原理・方法・実践—— 新曜社
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2007). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について 心理学研究, **78**, 9-16.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008a). 対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連 パーソナリティ研究, **16**, 350-362.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008b). 対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける自我同一性の様相 心理臨床学研究, **26**, 97-103.
- 清水健司・岡村寿代 (2010). 対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける認知特性の検討——対人恐怖と社会恐怖の異同を通して—— 教育心理学研究, **58**, 23-33.
- 白井大介 (2006). 自己愛的人格の2つのサブタイプにおける背景要因と自己対象体験 臨床教育心理学研究 (関西学院大学), **32**, 37-41.
- Smolewska, K., & Dion, K. L. (2005). Narcissism and adult attachment: A multivariate approach. *Self and Identity*, **4**, 59-68.

- 戸田弘二 (1988). 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル
——作業仮説 (working models) からの検討—— 日本心理学会第
52回大会発表論文集, 27.
- Wink, P. (1991). Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social
Psychology*, **61**, 590-597.
- 山岸明子 (2000). 内的作業モデル尺度の構造と 4 時点での変動——女子
看護短大生を対象として—— 順天堂医療短期大学紀要, **11**, 41-50.